

丈夫あつた、いろんな文句も見出した、達筆家もありがたかつた、御自慢のあつさりした水彩畫の肉筆賀状等はよろこばしかつた、がおのれは一番うれしかつたことはおのれの常々崇拜ぢやあ無い先輩先生として居る大下先生から戴いた賀状である、第一今年四十三年の一日から嬉しいことであつた。おのれは賀状を給つた先生へ厚く御禮申して居た。

思ひ出の儘

神奈川

加須美生

或る人曰ふ、「冬は色彩に乏しい」とそれは自然の觀察が不充分から出る言葉だらうと僕は思ふ、なぜなればさう云ふ人の寫生畫は、きつと色が單調で有らう、もし其の畫に種々の色が入つてゐれば、それは充分なる自然の觀察から出る色でなく、唯無意識に色を入れる丈で、自然がどうしても唯其時其畫が一寸キレイに手際善く描ければそれで善いと思つて居るに違ひない、少しく觀察を密にすれば、盛夏の濃い緑の中にも、其草特有の色が種々見えるに違ひない、わけて、秋は言迄もなく、冬の淋ひしい枯草の一樣に黄色に見ゆるも、つぶさに觀察したならば、乏しい處ではない、非常に面白い多くの色を見出す事が出来るだらうと思ふ、故に、いやしくも彩筆を手にする人々は、日常目に觸るゝもの何によらず心懸けて觀察して、其所謂審美眼を養成して置くことは急務であらう。

裏の竹藪

相模

枯村生

椽先から十間許りが畑で、それから先は四十五度位の勾配になつた草叢で、それが中頃から前は疎らに、奥の方へと段々に茂

つた竹藪である、家主が何時にも掃除しないので、竹の古葉が四五寸も積つて、前の枯芝の上迄一面に被さつて居る、毎朝八時頃になると前の畑の真中頃から藪へかけて、一面に日光を浴ひるので、畑に取残された菜でも藪の落葉でも皆んな白銀色にきら／＼して居る、草叢から藪へかけては丁度エロイオーカ

寫生

日比谷

T R

私は今同窓のMさんと目白の田舎道を歩ひて居るのだ、深く喰ひ込んだ車の跡にそふて行くと、一丁程で冬枯のした雑木林の方に行く、車の跡は雑木林の横から曲つて遠く下る阪道に續く、阪道の下は刈り取られた畠に續ひて遠く早稲田の方迄白く長く一線になつて居る、道の兩側には秋から未だ其生命をつないで居るイザケタ短い草が、葉の上に白くほ／＼りをのせて、百性の荷車から落ちた藁の間に、其青黒い短平な葉を見せて居る、二人は此道に別れて峠道にそつて土手の下へ出た、土手の下には瀛車の窓から、ほうり出された辨當のからが、其蓋と一間程離れて、土手の中途にある切株にひつかかつて居る、二人は土手の前の細徑に晝架を立てた、時々電車や瀛車が頭の上を氣味の悪